



## 一般図書館と専門図書館

上 山 春 平

今日、一般に使われている図書の分類法として、メルヴィル・デューイの創案になる十進分類法というのがあり、それをもとにして日本十進分類法 (N.D.C.) というのがつくられ、私たち、図書館の本を利用するものは、つねづねその恩恵に浴している。

これは、図書関係の方には周知のことなのだが、書物のとりあつかうテーマの種類を、まず大きく十に分け、さらにその一つ一つを十に分け、さらに……といったぐあいに細分する分類法である。その最初の大きな十の区分は、(0) 総記、(1) 哲学、(2) 歴史、(3) 社会科学、(4) 自然科学、(5) 工学、(6) 産業、(7) 芸術、(8) 語学、(9) 文学、といったぐあいになっている。

私の所属している人文科学研究所でも、もちろん、この十進分類法を採用しているわけであるが、この分類法にしたがわないかなり多量の書籍がある。それは、研究所が、東方文化研究所から受けついだ貴重な財産の一つである中国の古典類である。

それは、中国古典の伝統的な分類法である四庫分類というのに従っている。これは、あらゆる書籍を、(1) 経 (経書)、(2) 史 (歴史)、(3) 子 (諸子百家)、(4) 集 (詩文集) の四つの部門に大別する分類法で、さをきに挙げた十進分類法とは全く異った学問観前提とするものである。

私のはじめて人文研の図書委員の仕事を担当したころは、こんな旧式な分類法はやめてしまっ、みんな十進分類法で統一してしまった方が、よほど能率的になるのではないか、などと考えたこともあるのだが、最近、専門の枠をすこしはみ出して中国の古典類のお世話になるようになってから、この分類法が、研究者にとっては仲々便利なものだということを、しみじみと感じるようになった。

そうした経験をふまえて、十進分類法というものの性格を吟味してみると、これは、一般図書館用の分類としては一応便利にできているといえるのかもしれないが、はたして、学部や研究所に所属している専門図書館のための分類としては適当なのかどうか、首をひねりたくなるような点がなくもない。

これは、ほんの一例なのだが、一般図書館と専門図書館との機能の相違にもとづく運営の仕方の相違という点に、さまざまな問題がはらまれているようであり、大学のばあいは、その問題が、研究と教育の関係とからまりあって、困難な様相を呈しているようである。

(人文科学研究所教授)